Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-06

セント・キッツ島のラスタファリアンたち

長嶋，佳子
柴田，佳子

(Citation)
太平洋学会学会誌,32:61-75

(Issue Date)
1986-10

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001827

《現状報告》

セント・キッツ島のラスタファリアンたち

長嶋佳子

はじめに

前回報告したアングィラ島に次いで調査訪問したのは、セント・キッツ（セント・クリストファー、St. Kitts, St. Christopher）島である。セント・キッツ・ネヴィス国は一九八三年九月十九日にイギリスより独立したばかりで、首府はセント・キッツのバセテール（Basseterre）にある。日程の関係上、ネヴィス島（主要都市はチャールズタウン）には直接立ち寄れなかったので、より大きい（ネヴィス＝面積約一三〇㎢、人口一九八〇年現在九三〇〇人、セント・キッツ＝約一七六㎢、三万五一〇四人）セント・キッツ島で出会い、インタビューできたラスタファリアンについての現状報告を行いたい。

問題意識は基本的には前回までと同様で繰り返しを避けるが、原資料は書かれたものを一切入手することができなかったため[1]、インタビューなどで直接得たもののみである。またインフォーマントの協力も十分でなかったため、かなり断片的な情報しか収集できず、予備調査の予備段階程度のものではあるが、次回同島を調査できるのはいつになるかわからないので、一次資料の記録保存の意味で整理しておくことにし、より詳細な実態は後日の本格的調査を待つことにする。

一、セント・キッツ社会概況

この島のラスタファリアンを理解するために、若干の社会状況を説明しておこう。

同島はネヴィス島と同様、火山島であり、中心部には三火山群を持つ山脈がある（最北部にあるミザリー山が最高峰で、一一五〇m）。山間部の森林は、商業的価値はあまり高くないと言われている。半島部には塩水湖もあるが、アングィラのように製塩業を小規模ながらも営めるほどではなく、現在ほとんど採られていないようである。

北東貿易風が年中吹き、平均気温も三〇度を越すことは多くなく、比較的低い湿度のせいもあり、この点については国をあげて奨励促進中の観光業の発展には良好の条件を備えていると言える。年平均降雨量は一二五〇～一八〇〇㎜で、高地部（三六〇m以上）では二二五〇㎜以上に及ぶが、特に雨期はない。ただしハリケーン地帯にあり、時に被害を被る（一八八九年、一九二四年時は記録的なものだった）。

地形的には、主産業の農業は山裾で行われ、海岸沿いに首都ほか市街地が広がっている。

一四九三年、コロンブス一行により「発見」された当時、カリブ族が居住していた。彼らはこの「肥沃な土地」

より追われ、あるいは絶滅させられる運命にあったが、それに決定的打撃を与えたのが、最初の入植者イギリスと続いて占領したフランスであった。一六二三年（一説には一六二四年）以来、イギリスはアンティール諸島で初めて入植し、また後年になるに従い、ここから他の近隣島嶼に移っていったことから、徐々に「母」たる位置づけを与えられていく（Mother Colony, Mother of the Antilles と呼ばれた）。

一六六六年よりヴェルサイユ条約締結の一七八三年（この時より正式にイギリス領となった）まで、スペインや島の一部を占拠したフランスなどとの争いが続いた。[2] 一六五〇年に砂糖きびが導入されるまで、入植者は小規模自営農として自給用食物の栽培をし、タバコ、綿、しょうが、インディゴを輸出用に生産していた。十七世紀半ばまでに、ネヴィス島民も含めて約二万人の人口を擁していた。

砂糖プランテーションの発達は、他島嶼の例に漏れず、島社会を一変した。小自営農は犠牲となり、アフリカ黒人奴隷が大量に輸入された。一八三六年に解放されるまでに、彼らの人口は約十倍に達したと言われる。

奴隷制廃止（一八三四年）後、労働力補給はマディラ諸島やインドよりなされたが、彼らのほとんどは契約後、滞まらなかったので、現在に至るまで住民の人口構成は、圧倒的多数の黒人系とごく少数の白人系及びその混血から成っている。そしてこの黒人奴隷制に基盤を置いた砂糖プランテーション制度は、やはり現代にまでその経済・社会構造及び文化に甚大な影響力を及ぼしていることは忘れてはならない。

一九一一年にバセテールの近くに中心的な砂糖工場が建てられてから、砂糖生産は作付面積、収穫高ともに増加し、一九六三年にはカリブ海の小島中で最も富裕な島とさえ言われるようになる。可耕地のほとんどは私有で、一九七〇年代初めには一万六千エーカー中約一万五千エーカーを四十九のエステートが所有していた。[3] ただし一九七五年には、政府が砂糖農地を強制買収し、同産業を政府の管理下に置くようになる。

実はこの頃には砂糖産出量も輸出高も減少しているのだが、[4] 政府は砂糖農業労働者に対して総額七五万EC$（東カリブ・ドル）（七五年末は一US$＝二・三七五EC$。ただし七六年五月より一US$＝二・七〇EC$）のボーナス、農地強制買収対象者に第一回目の支払いとして百万EC$を支払った。これらは八四年の総選挙で勝利を収めるための、与党連合（セント・キッツ国民行動運動〈PAM〉＝ネヴィス改革党〈NRP〉）の政策の一環であったとされている。[5]

これは同島の農業中心の産業構造の中でも、いかに砂糖産業が現在に至るまで重要な位置を占め続けているか、如実に示しているものである。二～三年前でも砂糖はGNPの約二〇%、全輸出額（七九年で一七五〇万US$）の六五%は下らない。[6] またラム醸造やモラセス（molasses, 糖蜜）製造への投資に対して、財政インセンティヴ法に則して税制上の優遇措置も与えられている。[7] ほどである。ただし近年は農産物の多様化が奨励され、かつ製造部門、観光産業の育成・促進も強力に推進されつつある。

製造部門では二十七工場を数えるまでになり、GDPに占める割合も七七年の五・五%から八〇年の七・六%に増加している。重要なものは、それまで主に輸入に依存していた繊維、電子部品、履物製造となっている。ただし、依然として輸入超過（七九年で二五八〇万US$）の内容は食料ほか工業製品、機械類が優勢で、前途は必ずしも楽観視できない。

しかし、アングィラと比較するならば、土地条件（肥沃さ、有効利用度、住民の土地への愛着度等）、（完全に整備され有効に歯車がかみ合っているとは言い難いが）独立した政治機構、現存の諸設備、島民の労働意欲等々が相互に影響を及ぼし、「発展」する可能性はより高いと思われる。

経済成長を担う一大部門と見なされている観光産業についても、まず「玄関口」となる空港の整備は、アングィラから着いて目を見張るほどの、近代的なゴールデン・ロック国際空港（約二五〇〇mの滑走路と夜間着陸装置付）ができ、[8] しかも首都に近接しているため、観光客にとっては大変便利になっている。[9] 自然景観にも恵まれ、火山島として起伏のある緑濃い自然、白波立つ大西洋岸と波静かなカリブ海側双方の際立った黒い砂浜、奇怪な形の岩礁、多く保存されている史跡、舗装された主要道路、徐々に増加し整備されつつある宿泊施設等で、少なくともアングィラよりはかなり観光客の誘致率は高いと思われる。ただし、オフ・シーズンだったせいもあり、滞在中多くの観光客を見かけることはなく、近代的な新しい宿泊施設も森閑としていたが。

ところで再度強調されるべきことは、砂糖依存経済構造の弱点である。国際価格相場の変動、他地域、他島嶼との競合等々の影響で、経済発展の持続は困難な条件が揃っている。六〇年代より住民一人当たりの収入額は増大せず、それにもかかわらず年人口成長率二%を数える社会で、[10] 経済問題を軸に様々な社会問題もクローズアップされてくるようになったと言ってよい。それら

は他島嶼と同様、労働条件、賃金格差、失業といった労働市場問題、経済格差と密接な関係を持つ人種・民族問題、階層（級）意識、アイデンティティ問題等に及ぶものである。

政治的には植民地時代を通じ、隣接島嶼との連合、分離を繰り返した。例えば一八六一年にはネーヴィス、アングィラ、英領ヴァージン諸島が一括され、七一年にはアングィラとともにリーワード連合に統合された。八二年にはネーヴィスと連合し、一九五八年の西インド連合結成から六二年の解放時まで加盟した。

六七年にネーヴィスとアングィラとともにイギリス自治領（Associated State）となり、八三年五月九日にネーヴィスとともに独立する法案がイギリス議会で可決され、九月十九日独立達成という足跡を辿った。これで独立国家の国民というプライドを持つことになったが、独立へ至る過程での政党間、党リーダー達の確執は今だに続いていると見られ、必ずしも政局安定という状態ではない。[11]

文化的には、やはり長いイギリス統治時代の影響が濃く残っている。価値観には西欧＝白人文化優越主義の残存とも言えるようなものが見受けられる。宗教的にもアングリカンを中心にメソディスト、モラヴィア派といったプロテスタント教会が優勢で、ローマ・カトリック教会も信者を集めている。一般的価値規範として、人生の三大通過儀礼である誕生、結婚、死に際しては、キリスト教式儀礼を欲している。ただし結婚に際しては他島嶼同様、いわゆる同棲婚ないし慣習法婚（コモン・ロー）を経て資金が貯えられてからキリスト教式に則る方法を、黒人下層階級の多くの人々はとっている。

教会堂はじめ古い建造物は植民地時代の名残りをとどめているが、生活様式は階層差を反映している。また一九六一年から普及している国営ラジオ放送（ZIZ）は、七二年から始まったテレビ放送よりもよく利用され、首都のダウンタウンの飲食店等からは大きな音量のラジオの音楽番組が流れていた。庶民の足であるミニバスもラジオやカセットを通して音楽を流し続けているが、その主流は軽快なカリプソである。その他スティール・バンドも人気があり、カーニバルは一大行事である。

七四年にネーヴィス・ドラマ文化協会の主導で始まった「カルチュラマ」（Culturama←culture＋drama）は、ネーヴィスのみならずセント・キッツ島民にも文化的刺激を与え続けている。それは「伝統的」文化遺産の保存と発展、新しい文化行事の振興・育成等を通じ、文化的アイデンティティの再生も図っているようである。それは従来否定されてきたアフリカ黒人文化の見直しを含むものではあるが、黒人の誇り、尊厳、威信、優秀さを説くラスタファリズムを擁護ないし賞讃するものとは必ずしもなっていず、むしろ異端視されている傾向は否めない。

以上、セント・キッツ社会の概況をかいつまんで述べたが、次にこの社会に住むラスタファリアンたちの生活状況を報告しよう。

二、ラスタファリアンたちの生活状況

この島でも大多数のラスタファリアンたちは男性で占められ、しかも四十才未満の者である。[12] ヴィンセントやジャー・ユース（Jah Youth）をはじめ、実際にインタビューした者、見かけた者たちはほとんど二十才台であった。

アングィラで「セント・キッツにはここより多勢いるさ」と教えられたとおり、その絶対数は多かったが、誰一人、島に（あるいは国内に）総勢何人いるか答えられなかった。あるいはそのように質より量を測ろうとするような質問には答えようとしなかった。

この島では若干の組織化が見られる。全体として属するものとしては「ナイヤビンギ・オーダー」（Nyabynghi Order）という名称の、リーダーも内的役割分割など、実体的組織が社会的に機能する上に必要と思われるものは一切持たない、ほぼ観念上の信仰共同体の類に等しい集合概念を口にする者もいた。ただし決して全ラスタファリアンによって共有されている概念的組織ではない。

また、"Liamiuga Rastafari Movement"と"Rastafari Brethren Movement"という二組織団体も存在する。この二つはラスタファリ研究で著名なカナダ人女性人類学者C・ヨーニーが確認したもので、八二年にオンタリオ州のヨーク大学で開催された「ラスタファリ国際代表者会議」委員会に各代表者 Ras Iban Woods, Ras Elix を送り出していた。今回、彼らと直接コンタクトをとれなかったのは極めて残念であった。また後述するハイレ・セラシエ帝生誕記念行事の責任団体の長のラス・アイバル（Ras Ibal）にも会えなかった。

これらの組織や代表者ないしリーダー格の位置づけや、どのような公的意見を持っているかは不明であるが、本報告では、このような組織からははみ出した無名の個々人に焦点を当ててみよう。

紹介されたり少し名の通った者では、他島嶼での例に漏れず島内不在という場合もあった。例えば「町（バセテール）の『アイボ』(Ibo）と言ったらす

ぐ分かる（はずの）とても長いロックスを持ったラスタは、米領ヴァージン諸島セント・トマスにいた。また長期間ロックスを誇っていた二十八才のスター・ポールは、島生まれだが、アングィラでの居住・労働経験を持つ。彼地の政府で電気関係の仕事に従事していたが、車を買って乗り回し、ガンジャも扱い、その素行の悪評判が原因で政府より追放されたと噂されている。現在は歌手、作曲家になっているという。

またサンディ・ポイント（Sandy Point）の住宅街に住む三十才前後のキボ（Kibo）は、アメリカ人女性のラスタ、アイマ（Ima）と同棲中である。彼はアングィラのラス・スマイト（本誌でも紹介）の友人であるが、彼もアイマも島外にいるとのことで、その弟アンディに会った。

家族の事を尋ねても父親の話は一切せず、母親（親子で姓が異なる）により育てられ、アンディのほか妹や弟もラスタの経験があることが分かった。ただし弟マイケルはドレッドロックスを切り、外見上はラスタだとはわからない。切った理由は、社会への適応手段に求められた。キボは「セント・キッツ・エンタープライジング」という名の小さな電気、ディーゼル・エンジン等を扱う店で働き、その他サンダル作り、カーシートのカバー作りといったクラフトを手がけている。キボが白人のラスタと同棲していることと羽振りが良く大きな家を持っていることは近所でも評判で、彼らの「奇異な」取り合わせが抜きんでた存在となっていることを証していた。

やはりサンディ・ポイントに住む十八才のビッグ・ジェッド（Big Jed——"Jed"はアムハラ語で「一緒にいること」を意味すると説明）は、ラスタになってまだ二年であった。その動機は「義人」（righteous man）になりたかったからだと言う。彼を含め、ラスタになる前はアングリカンだった者が多い。サンディ・ポイントにも、一七一六年に建てられた古い大聖堂（セント・アン・アングリカン・チャーチ）がある。会堂は今は使われていず、内部も入れないようになり手入れされていないが、外の墓にはいくつか墓碑の文字も読めるものがある。

サンディ・ポイントの「隘路」スラムに住むジャ・バボ、アイマ夫婦を訪ねた。サンディ・ポイントの周辺部に行くにつれてスラム化された景観となり、下層階級の黒人系住民の「清潔さ」からは隔たった生活状況を呈してくるようになる。

ジャ・バボ（Ja Babo——この名については「アフリカの名」と言うのみで他には何の説明も加えられなかった。ただし"Ja"は他のラスタ名にもよく使用される"Jah"と同種同根と考えられる）は三十四才で、結婚生活十一年。近くの山の斜面に四エーカーの土地を持ち、羊九頭、山羊四頭、ろば二頭を飼育し、ブラック・エドゥ（エドゥはタロイモの一種）、ダシーン（タロイモの一種）、タイムほかの薬草[1]、バナナ、カボチャ、サツマイモ、ヤムイモ、タニア（タロイモの一種）、ピーマン、キュウリ等々を植えている。これらの労働は妻アイマ（Ima）も協力する。

ほとんどが自給用ではあるが、余剰物は売りに出される。彼はこの農地での労働には格別の価値を与え、勤勉に働くことを誇っている。海外旅行（これで短期の労働も不可能ではない）用の身分証明書もポケットに入れているが、その写真にはロックスは無い[13]。現在のロックスはラスタカラーの毛糸のタムの中に隠れている。

ガンジャを秘密裡に栽培しているかははっきりと確認できなかったが、少量は時々行っているようである。ただ警察の手入れが一頻繁で「他人の通報（「密告」）もありうるので、危険はあまり冒さないようにしている。ガンジャは無論栽培のみならず売買も非合法だが、やはり半ば公然と取引はなされている。彼によると、一袋一〇ECS。

訪問時は昼前であったが、ちょうど彼が料理の準備中であった。高床式の木造家屋の出入口に面して、広くはないヤードの空間をとってある。隣との境界は、トタンを横にしたり、木の枠とバナナやヤシの葉で編んだムシロをかけたりして、大人の背丈位の高さの囲いを作ってある。その一隅に机を作り台所とし、若干の鉄製鍋、プラスチック製皿とバケツ（水入れ用）、コップ等を置いてある。大木の前には炉を掘り、大きな石三つでかまどとしている。とってきたばかりの新鮮な色とりどり（赤、ピンク、黄、紫、青等）の魚の下ごしらえをしていた。

魚の種類は現地名でブルー・ドクター、ホワイト・ドクター、グァーント、ブラウン・トゥーム、パージェットといい、鯛の一種のような白身の魚であった。

ラスタファリアンといってもその生活様式は個人によって様々だが、彼らの場合、豚をはじめ"scavengers"の肉は一切口にしないが、さほど厳格な規範に縛られてはいない。アイマは「何でも食べる。ただし豚肉を除いては」と言い、魚は多く食べている。塩はやはり摂取しないが、味付けは豊富な薬草等のシーズニングによって行う。その日はクローヴ、ニンニク、タイム、アサツキを混ぜていた。これらは木（"skinnip wood"）をくり抜いて作った臼と棍棒の形（持って作業しやすい太さの柄の部分のつけ根部あたりから若干太くなり、少し斜め前方に曲が

った形をしている）の杵でついて細砕してから魚につける。この臼と杵のセットを〝mata and pishue〟と呼ぶ。

この魚はフライにされ、その後スープに（〝man soup〟）入れて食べる。彼らの場合、昼食が一番の御馳走であり、昼からの労働に備える。

ジャマイカのラスタファリアンの多くは、女性に多くのタブーを課し、「血を見る」（月経時、出産後一定期間等）間は穢れているので料理してはならないとされているが、何故ジャ・ババが調理し、アイマでないのかについては、理由らしき理由は得られなかった。月経中でも料理をすると語ったアイマは生後三カ月の乳児の母親であり、産後の生活と料理との関係を問うたが、否定された。

そのアイマは二十才であるが、七二年からラスタである。その十四年間のうち十一年をジャ・ババとの結婚生活が占めている。つまり十才の時に「彼と出会い、彼は本当に私に色々と話をしてくれた」ので一緒に住むようになったという。その詳しいいきさつは話してくれなかったが、彼女は幼少時に母親が死んで以来、祖母（母方）によって育てられていた。祖母に連れられてよくアングリカンの教会に通ったりし、「まあ楽しかった」日々を送っていたのだが、大きくなるにつれて生活が変化していった（その変化についても何も語りたがらなかった）。

彼女は自分自身の生活について尋ねられても自ら答えようとせず、〝He go do dat.〟（彼がそうするから）とか、「あんたが理解できるのは彼だけよ」と、「夫」を代弁者にしたてたがった。このような傾向はアイマにのみ特徴的なことではなく、むしろ他の地域のよりおとなしいタイプのラスタ女性にもよく見られたものである。

つまり女性（妻＝女王）は男性（夫＝王）の従者でもあるのだから、すべて重要な事柄は主人である男（夫＝王）の意見に従うべきで、彼の意見こそがほぼ絶対的価値を持ち、尊重されるべきなのである。それは女性に関することも男性が決定権を持つものと解釈され、女性が意見すべきではないという態度にもつながる。それは時に極端に解釈されて実行されてもいる。女性は寡黙で、男性に彼女自身の見解も代弁させるべしとする傾向があるのである。

ただし、これは一部の者たちがつくり出し規範化し実効化しているものであり、それと正反対の意見を述べる者も少なくない。また女性の中には攻撃的で、あるいは積極的なリーダーシップさえ発揮している者たちも、他の島嶼ではいることを強調しておきたい。

（とにかくアイマはできることなら一言も話したがらず、すべて夫に聞いてもらいたいことを態度と若干の言葉で示そうとしていた。彼女自身が何故ラスタになったのかを含めて……。幸い彼女の大切な赤ン坊（その名もジャ・ババ）が起き、彼をあやしながら、少し話のきっかけを作れたので、若干ではあるが口を開いてもらうことができた）

彼女がラスタになった直接の契機は無論夫ジャ・ババである。物心ついた頃、気が付いてみると、周囲の人々はあらゆることを話題にしたが、「何一つ（大切な事を）教えてくれなかった」。ハイ・スクールは行ったし、先生はアフリカについての知識も含め色々教えてくれて十分良かったが、「何が善悪か」「自分がいかにあるべきか」についてなどはよくわからなかったという。「神」はジャ・ババを通して、「真実」に「正しいこと」を示してくれた。それは「真の健全な（人間としての生きる）権利」であった。それがラスタファリズムであったという。

「彼女にとってラスタ女性と、ノン・ラスタの黒人女性との違いについて」等のより混み入った質問になると、ただ「よくわからない。彼が答えてくれる」を繰り返すのみであった。しかし、それでもアイマは、自分の生き方に対して満足しており、「ラスタとして生きるならば、ラスタは父（なる神）に完全に生きることになる」という常套表現をうなずきながら唱えるのであった。

黒人の女性としての誇りないし自覚について尋ねた時に口ごもっていたアイマが、これこそ唯一の解答とばかりに差し出した「歴史」の小冊子があった。彼女自身この本で黒人女性としてのあり方などを教わったと言ったが、聖書に次いで大切なものとしていた。

それはM・C・ムーアヘッド著『黒人女性への手紙——人類の遺産』という特集号[14]であった。手垢で汚れ、半ばボロボロになり途中の頁も飛んでいるような、カラフルでどぎつい絵表紙のものであった。米領ヴァージン諸島セント・クロア島の首府フレデリックステッド発行のものなので、さほど人口に膾炙しているものとは思われないが、「黒人女性は慎しみ深く、沈静でいなければいけない」ということを教わったと強調した。

彼女は十四年間もラスタでいたにもかかわらずロックスはごく短く、ピンク地に白い小花が散った木綿のヘッドタイを巻いていたが、服装に関してはベルトにラスタカラーのものをしていた以外、全く一般の人と変わりなかった。ただバステールのマーケットで出会った時の彼女は、ラスタカラーで装っていたので、外出して公の場に出る時と家の中や近所にいる私の場では、そのアイデンティティの外的表現形態を区別していることがわかった。一般的に見ても男性よりも女性の方が、こ

のような公私の区別及び態度、表現に対して神経を使っているようである。

彼女にとってアフリカもエチオピアもセント・キッツも皆同一のものであり、「唯異なった支族（tribes）が住んでいるから異なった事柄が起きているだけで、全く同じ黒人、アフリカ人」として住民は認識されている。直接は語らなかったが、これを敷衍して考えると、アフリカ帰還は実際にアフリカへ移住しなくともセント・キッツというアフリカに住んでいるのだからそれでよいと理解されうる。つまり住民の意識、認識の問題に還元される。ただしそれは逆にもとれるわけで、セント・キッツにいなくてアフリカに住んでもおかしくない、となり。セント・キッツへの執着はとれてゆく。どこの「アフリカ」でもよい、生きてゆけるという気構えの国際派ラスタファリアンを生み出す土壌はここにもある。

ところで「神」は絶対的に「セラシエ・アイ」(故エチオピア皇帝）でなければならないと説いているが、セント・キッツの多くのラスタもそうであった。そして彼は「生ける神」として崇拝されている。つまり「知らない人たちが死んだと言っているだけなのさ」とセラシエ帝死亡説を全く受け入れない。

ジャ・バボもそうであるが、ラスタとしての召命観はかなり強く持っている。彼はやはり常套表現「呼ばれるものは多いが、選ばれるのはほとんどいない」(“Many are called but few are chosen”）を誇らし気に口にしたものである。「子供たちには私たちと同じようになってもらいたい」とアイマは語ったが、それは「アフリカ人」として、ラスタファリアンとして育つことを意味している。

アイマは八人の子供が欲しいと願っているが、ここには多産、子供の誕生を神の祝福と見る見方が反映されている。近親の女性が身近にいなかったアイマは病院（八時半から四時まで診療可で、いつでも開いている）で出産したが、どの程度病院から出産後の生活や育児について知識を与えられたかは不明だった。母親になって間もない年若きアイマの育児行動は試行錯誤で進められている。

ラスタファリアンとして「自然体」をモットーとしているし、また他島嶼でもそうだが政府も奨励している母乳育児を、当然アイマも実行しているだろうと思ったが、哺乳ビンでココナッツ・ミルクを与えていた。ジャ・バボには「大人と同じものを与えている」と言う。なぜ母乳を与えないか聞くと、「よくわからないけど、あげても受けつけなかったから。より濃厚なものをいやがったの」と答えた。ココナッツ・ミルクは滋養分高く、ジャ・バボも元気そうではあった。

屋内の壁にはマーカス・ガーヴェイの写真、ジャマイカ人芸術家ラス・ハートマンの著名な絵画、「誕生せんとする社会主義を防御せよ!!」のスローガンが並ぶアフリカ大陸図等々が貼られ、幼ないジャ・バボも自然にラスタになってゆく環境があった。

バセテールで出会った二十八才のジャミリア（Jamilia ＝「美」）は三人の子供の母親である。長女六才のジャミリア、次女四才のキダダ（Kidada ＝「小さな姉妹」)、そして抱いていた三才のタキシュマ（Takishma）を養っている。七七年以来ラスタになり、九年間「満足した生活」を送っている。しかし学校があるのでロックスは長く伸ばせない。政府関係のクラフト・センターで働いて収入を得ている。二年前からアンティグァ人の一才年上のトゥンダ（Tunda）と暮らし始め、彼を夫ないし王と呼ぶ。しかし会った当時彼はアンティグァにいて別居状態ではあった。女性の場合は特にそうだが、母親とのいさかいがラスタになった当初は絶えず、「理解してもらうのに」(多くの場合は諦めてもらうのだが）骨が折れたとこぼす。彼女はアイマと違ってより積極的なタイプで、自分の意見を憶せずはっきりと述べた。

以上述べたところからも推察されるように、セント・キッツ独自の生活状況が浮き彫りにされることはなかったが、ただ一つ注目してよいのは、彼ら全員が何らかの形で手に職を持つなり、家族の一成員としてきわめて重要な役割を担っていることである。他社会で極めて顕著なラスタ＝失業者の図式はここではそれ程際立ってはいなかった。

確かに出会ったラスタの中に失業者もいて、「社会の制度」「政治」にその原因を求めていたりしたが、多くの若者ラスタは何とか自活の道を得ようと努力はしており、そのために大切なロックスを切り落として社会の中に入ってゆこうとしている者が少なからずいたことは事例でも明らかになった。これは取りも直さず、社会のラスタに対する一種の嫌悪感と差別意識の表現に厳しいものがあることを物語っている。つまり「見苦しいラスタ」には職を与えない。社会から排除してしまおうとするオストラシズムがあるのである。そしてそれを十分知った上で、ラスタの方も賢明に生き抜く道を探っているのである。それも社会の「寄生虫」としてではなく、「創造的貢献者」として。

では次にラスタの社会的見解に焦点を当て、セント・キッツ社会に対する批判や展望、彼ら自身の願望の一部を明らかにしてみたい。

三、ラスタと外部社会

バセテールに住む二十三才のアントニー・ヘンリーは八年間ラスタとして生活し、その友人A・K・A、プロフェッサー・アケエドゥ・マカシャンティ（Akeedoe Makashanti. "Akeedoe" はアムハラ語で「闘う人」を意味すると説明。"Makashanti" は西アフリカのアシャンティ王国の勇敢な戦士）と共に、幅広い知見を持つ聡明な若者の代表者であった。彼らは自分たちが「冷静な立場」で物事を見きわめていると自認している。

ラスタの仲間内でリーズニング(reasoning ＝談合)の場を通して自分たちのあり方、今後の展望、社会批判、国際問題について幅広い論議が交わされているのは、この島でも同じである。その中から合意に達する場合もあり、物別れになる場合もある（元来リーズニングは、合意達成の手段でも目的でもない）。自分たちの社会的位置づけをめぐり、また海外の「兄弟」との連帯の方向性なども最近議題としてクローズアップされるようになっている。

セント・キッツ社会では、ラスタ、ノンラスタを問わず、失業率の増加、安易な生き方を求めたがる傾向、あり余るエネルギーを破壊的行為に向けてしまう傾向等に伴い、若者が近年、世間から厄介者扱いをされているが、そのこともラスタの間では大きな問題となっていた。社会的関心の高いラスタとしては、「建設的でありたい」と願い、それがいかにして社会的に実践されるかについては、ジャマイカなどからパンフレットを取り寄せて参考にしながら議論しているという。

最近著しくラスタが貢献度を高めている領域は文化のレベルで、芸術関係の分野のプロモーションに熱を入れている。それはドラマ、絵画彫刻、クラフト製作、音楽、ダンスなどを含むが、これらは彼らが生活の基礎技術とみなしている塗装（ペインティング）、機械工学、音楽の三大分野と密接に関連するものである。

ところで、これらの分野は、長い歴史の中で「精神的抑圧」や「苦難」の対象となってきた。それゆえ「今だにイギリスのものを祝い称賛している」植民地的精神構造の一大変換を早く成就すべきだ、と彼らは考えるのである。

それは政治的独立は達成したものの、国民意識ないし国民性はイギリスより分離していないという批判を指す。イデオロギーが独立前と同じならば、独立して良かったか悪かったかはわからないという意見、「独立後の変化」に対して極めてアンビギュアスな態度をとっているラスタの見解は、部外者にも理解できるものである。

ラスタのなかには独立したことに対して皮肉な見方をする者が少なくないが、それは前述のイデオロギーないし精神構造の変革の遅滞あるいは時代錯誤といった状況のせいばかりではない。彼らは主要な経済基盤である砂糖産業の停滞、衰退傾向を知っている。

「砂糖は毎年減産さ。独立は十年前にできたはず。それなのに経済状況は独立後悪くなっている面もある。インフレ率は四倍にもなった。投資の問題もある。あまりにも多くの規則や非能率な官僚主義がまかり通っている。観光業だってきちんと組織化されていないし、隣り同士（の島々）で競い合ってうまくいかないさ。とにかくすべて金次第のようだ。人生、金がすべてじゃないのに。虚栄だよ……」

このように独立後の政府の諸政策並びに社会状況に関して批判的な意見が出るのは、ラスタの間からのみなのでは決してない。しかし大多数の国民は、批判はあっても独立を喜んでいるのに対し、既存の体制からは常に排除や異端視され続けてきたラスタには、独立したからといって待遇や環境は変わらず、属領であった時と大差ない、と述べる者が多くいたことは、やはり注目すべきであろう。そこには「国民」として社会活動に深くはコミットしない姿勢を持ち続けるラスタの姿がある。

一方では手に職を持ち、その技術や知識、知恵を投入し、収入を得るのみでなく、雇用／社会側から有益な人間としての印を受け取ること、及び社会的承認に伴う自己の存在証明、一種の安心、満足感を得るという社会的相互作用を彼らが求めていることは前にも述べた。そしてもう一方では、ノン・ラスタの国民とは一線を画した社会参加のあり方を探り実践しようとしている姿、そこに別種のコミットメントがあるのである。

彼らは社会から完全に浮上ないし遊離してしまい無視され続けてしまう無益な、あるいは有害な人間としてではない存在様式を求めている。また破壊的、消極的ないし単なる皮肉的言動によって否定的自画像（ラスタファリアンとしての）を増強するのではない。むしろ嫌悪されながらも社会へ警鐘を鳴らし、社会的腐敗を蔓延させないよう予防接種をし、強壮剤入りカンフル注射を打ち続けるような存在でありたいと願っているように思われる。

滞在中、折りしもハイレ・セラシエ帝の誕生（七月二十三日）を祝う特別の記念行事があった。ラスタがいるどの地域でも、同じ頃、何らかの催し物がもたれるはずの重要年間行事の一つである。この時は首都バセテールの一小学校の校庭を借りての夕方からのサッカー競技で親睦を深め合い、夜はレゲエを中心とする生演奏及びレコード

鑑賞とリーズニングが行われることになった。

紹介されて夜の部を見に行った。バセテールを中心として島のあちこちから集まっていたようだが、人数は正確に確認できない。暗闇の中の広い校庭のそこここに分散して二〜三人、あるいは数人以上がかたまって見えたが、ざっと数えただけでも百人近くはいた。たいていの男性（女性は二〜三人見かけたのみ）はガンジャを吸っていたので、校庭の外にまでその匂いは届いていた。レゲエのボリュームもかなり大きく、さぞかし近所迷惑だろうと思ったが、彼らは一向気にかけない。

一つの講堂の中ではステージやレコードのセッティングの最中であったが、調子が悪く、いつ始まるかわからないと言う。といっても音は鳴り響き、ガンジャを回し飲みしながらのおしゃべりは始まって久しい。彼らの儀礼は始まりも終わりも定まった時間、空間、形式に縛られているわけではないので、見方によっては儀礼としてはすでに始まっていたとも言える。ただ中心部分を成す熱狂的生演奏とより多くの者が集まって意見交換をするリーズニングがまだ始まっていないということだけなのだと解釈することもできた。

『しばらく様子を見させてもらいたい、できることならインタビュー、写真撮影、録音を許可してもらえないか尋ねると、それまで見知らぬ外国人の挙動不審に苛立っていた数人が取り巻き、不服の言を述べ始めた。また正式の責任者、リーダーがいないという理由もあり、ラスタ特有の不信感と怒りを露骨に出し始めた。「これは仲間内だけの大切な祝典だ。見知らぬ者は入れたくない」ときかない。いくら説明しても余計に懐疑的になるばかりなのを見てとると、カメラ等の機器類を破壊されないうち（彼らはこれらの行為でも悪名高かった）に退散することに決め、その後何が実際行われたのか確かめられなかった。

このような排他的態度は何度も経験したし、彼らのかなり手ひどい破壊行為（極地は殺人）も知られた事実である。ノン・ラスタにとって様々な神秘的かつ不可解な言動（多分にそれらは無知、偏見、噂、誇張された醜聞、独断に基づくが）は、一度でも身近に経験した否定的印象によって一層歪められたものとして個人に定着する。潜在的に社会が共有しているラスタに対する「不当な」イメージは、確かに唯一回の会見でもそれを劣悪化して固定することを容易にしている。

それに反し、より肯定的な印象を鮮明化し、あるいは否定的イメージを倒壊するような経験は、一度だけでは困難である。同じような見直し経験を積んで、ようやく先入観から解放されうる。それとても、ラスタ全体の印象のレベル・アップにはなかなか繋がらず、部分的及び個人的称賛に滞まる場合が極めて多いのである。

そのような個人のイメージ形成と定着といった基層的部分における、ラスタにとって困難な外部社会との「健全な」文化・社会的交換については、明らかに彼らの方が不利な条件を背負っていることは、彼ら自身もまた世間の人々も実は知っていると考えてよい。それを知った上でラスタは世間に「理解」を求めるし、世間は彼らに「品行方正」や「勤勉」、そして何よりもガンジャへの耽溺の抑制ないし中止を求めるのである。

ガンジャ問題はラスタと外部社会との関係正常化において最も頑固なネックとなっている分野であろう。確かにガンジャはノン・ラスタの間にもかなり浸透し、警察や政府当局の頭痛の種になっている。しかし元凶はラスタにあると信じられているのである。特に中流階層以上の人々、正統派キリスト教徒にとって、ガンジャは恐るべきものとして映る。ラスタについて穏健な意見を述べる場合でも、ことガンジャに関しては許しがたき代物のレッテルを貼る。彼らが主に悪影響を与えているとみなしている点は、①それが習慣性のものであること②本人のみならず他人に強要ないし奨励していること③子供が幼少時より汚染されてしまうこと④喫煙した後、自己統制がきかなくなる場合が多いこと⑤常習者の中に犯罪行為に走ったり、全くの無気力になったり、あるいは精神障害をきたしたりしても、その後の監督が行き届かないこと―― 等を挙げることができる。

一般的に多くのラスタは「真のラスタ」とはみなされていない。そしてラスタの仮面を被ることによって働かないことや盗みの口実にしているとされている。それはラスタが「体制」のためには働かない人々、つまり自給自足をモットーにし、他者、特にノン・ラスタの「バビロン」的組織に依存することを嫌うイデオロギーの持主というステレオタイプがあるからでもある。また盗みに関しては、「持たざる者は持てる者から余剰分を強制的に受け取ってしかるべき」という富の公平分配に基づくイデオロギーを一部の者が実践してきたからである。これらは当然プロテスタント的勤勉とそれに見合う労働報酬の受与という倫理観に則って生活している者たちにとっては不貞で脅威的なものと映るのである。

また彼らのほとんどが十代ないし二十代という人生のアイデンティティ危機時代、しかもその後の人生進路の決定期という重要な時期にラスタになっていることが、親の世代の悩みとなっている。いくらラスタのいかがわしさ

や反社会性、人生の落伍者というレッテルを貼って説いてみたところで、若者世代はすでに親の世代とはギャップを感じ、反感を増すのみである。学生時代にロックスを伸ばし始めるのはかなり困難だが（見つけられたらロックス切り落としや強制退学という学則を設けている学校は多い）、敢えて退学の道を選ぶ生徒は少なからず出ている。ともあれラスタになることは周囲の者にとって非行化を意味していることは相違ない。

また家庭内トラブルが引き金となって子供がラスタになることもある。今では、ラスタの家族が強固な愛情に包まれて安定していることは、知られている。つまりラスタの家族は一種の理想像にもなっている。父親不在、離婚、不和など様々な問題を抱えている家族が多いなかで、親への反抗の一表現として、また自立の一表現としてラスタになり、ラスタの家族をつくろうとする。それを抑制する力を持つ親は少なくなっているようである。口論しても子供の方は自らの選択の道を歩んでいる。

以前概略したように、ラスタと外部社会の関係は相互に歩み寄りを見せつつある面もあるが、微妙なアンバランスを持っている。両者の望むような関係にはまだ当分入れそうもない。

おわりに

資料が不十分なためもあり、大ざっぱな現状報告になってしまったが、今後綿密な実態調査によって補えば、セント・キッツ社会のラスタファリアンの特色がより鮮明に浮かび上がってくるであろう。

セント・キッツはジャマイカほど社会内の格差及び居住環境は劣悪でなく、セント・トマス（米領ヴァージン諸島）でのようには周縁性（彼らの周縁意識も含めて）は明確化していない。またアングィラほど人的移動が頻繁で流動的でもなく、かつ社会経済が停滞しているわけでもない。独立後二年という若い極小国が自立と独自の発展を目指して歩むなかで、確かにラスタたちの存在、彼らの存在参加のあり様が、少なからぬ影響を社会（国家形成）に及ぼし続けていることは確かである。

出会ったラスタの多くはこの国に対して、吐き捨てたいほどの苦々しさを持った批判を持ってはいなかった。彼らの「文化的促進」への貢献熱を考えれば、彼らがいかに社会的に有益な存在になりうるかがよくわかる。彼らと社会との今後の掛け引きいかんで、彼らの才能とエネルギーをどの程度、またいかに活用できるか決まってくるであろう。

〈注〉

(1) 教育・健康・社会情勢省の大臣、高官と直接コンタクトをとり、公文書の関連・参考資料を入手できるはずであったが（無論、ラスタファリアン自身に関しては無いのではあったが）、離日直前に空港まで届けてくれるとの口約束も、また日本へ送ってくれるという約束も果たされないまま今日に至っている。

(2) 現在までよく保存されているブリムストーン・ヒル砦などは、英仏闘争の記念碑となっている。

(3) Mitchell, Harold, 1972, Caribbean Patterns : A Political and Economic study of the Contemporary Caribbean (Edinburgh & London : Chambers), p. 179.

(4) 一九六四年には四万三〇〇〇トンを産したが、七五年には半減し、二万四六〇〇トンとなった。七三年からは沙糖産業振興団（SIRO）の援助を受け、徐々に効果は上がったようではある。

(5) Duncan, Neville C., 1985, "Caribbean General Elections — 1984 — An Overview", Bulletin of Eastern Caribbean Affairs, (Special Issue — General Elections in the Eastern Caribbean in 1984) Vol. 10, No. 6, p. 4.　セント・キッツ・ネーヴィスの八四年総選挙に関しては、Douglas Midgett, "An Analysis of the 1984 General Elections in St. Kitts – Nevis", Ibid, pp. 18–28. も参照されたい。

(6) 『ラテン・アメリカ事典』（一九八四年版）ラテン・アメリカ協会　p. 969.

(7) その他対象となっているのは菓子製造、果物加工、ピーナッツ加工、繊維加工、輸出用果実生産、ココナッツ製石けんと油生産が含まれており、政府の重農主義をよく示している。

(8) アングィラの「国際空港」ではとても大型機、ジェット旅客機の発着は不可能である。

(9) 少し古い統計だが、六〇～六八年の空路、航路で到着した人数は、航路の方はムラがあるが、空路の方は着実な伸びを見せ、六〇年の八一六一人から六八年の二万二三九〇人と約三倍増を示している。An Abstract of Statistics of the Leeward Islands, Windward Islands and Barbados., Unit of the West Indies, Institute of Social and Economic Research (Eastern Caribbean), August 1971., p. 3, Table 2.

(10) Mitchell, ibid.

(11) 特にシモンズの率いるPAM＝NRP連合政権は、八〇年総選挙でそれまで二十九年間政権を掌握してきた労

働党（SKLP）を一議席差で敗った。しかしSKLPが独立に関して総選挙を行い、ネイヴィスに強すぎる自治権付与を批判するなどの意見をしたにもかかわらず、シモンズ政権が独立を急ぎ、SKLPは独立式典参加をボイコットしたいきさつが知られている。

(12) 年齢は一九八五年七月の調査時現在のものである。

(13) ラスタファリアンを敵対視し危険人物扱いするのはどの国も同じで、ラスタファリアンだというだけで入国拒否される例は後を絶たない。海外を自由に往来しようと思うと、ロックスという最も顕著にラスタファリアンとしてのアイデンティティを示しうるシンボルは極めて厄介な代物となるのである。

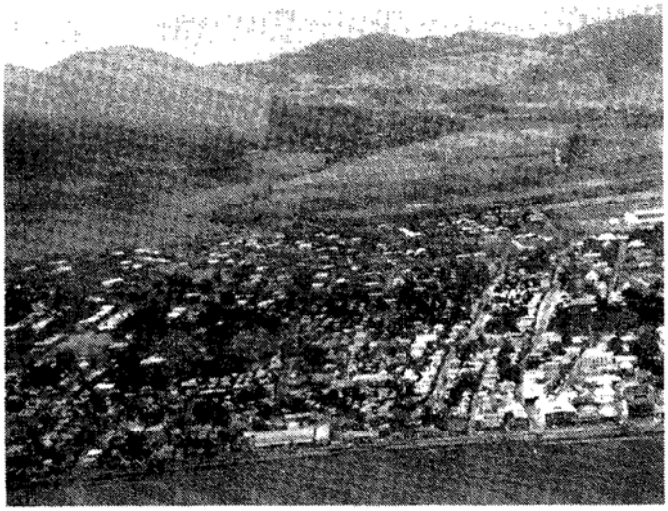
(14) Mario C. Moorhead, "Letter to a Black Woman — Demise of Man" (Special delivery), UCA/M 20: Frederiksted, St. Croix. n.d.

（付記）本報告は日本学術振興会特別研究員として授与された文部省科学研究費補助金（奨励研究（A））の助成の下で行われた研究の一部である。記して謝意を表したい。

写真1　さとうきび畑

G. Rock 国際空港付近。刈り取りが始まっていた。

写真2　首都バセテール



中央から右端へ伸びているのが滑走路で海岸へ至る。

中央に時計塔，教会堂が見える。電線にかけられている色とりどりの電球の間に国旗がかけられている所もあった。

写真4　古い教会堂

アングリカンを中心として，石造りの大きく堅固な古い教会堂は地方の農村にも数多くある。

写真3　バセテールの医者の家の中

家具調度類はよく磨かれ，家人の誇るものである。

写真5　バセテールのマーケット日

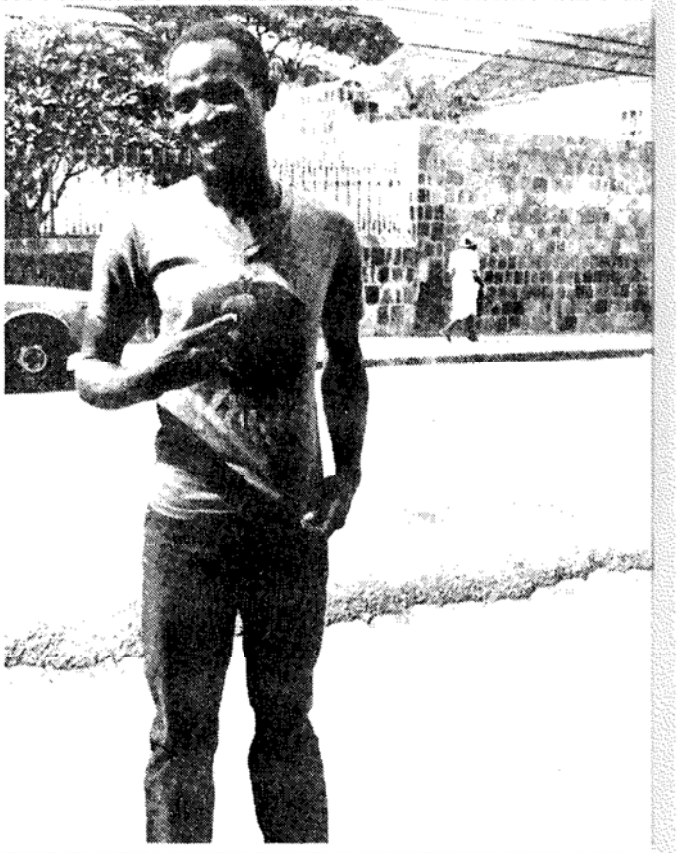
屋内市場にはあらゆる種類の農産物のほか，動物皮のなめしたもの，肉類も売っているので強烈なにおいがする。写真は山羊。頭部，脚部も内臓部も重要な売物である。生鮮品のほか，ネヴィス島の土壌で作った土器類，植物繊維製のカゴ類，ホウキ等も販売される。

手前のタムを被ったラスタはかき氷屋。隣の半裸の男性もラスタ。右方の人垣は路上マーケットで買物する人たち。その右方は海岸で獲れたばかりの魚をボートで売っている。

写真7　バセテールのラスタ

ライオン，セラシエ帝の似顔絵が象徴的に重なったピンク地のTシャツとピンクのヘッドタイ姿の若い妊婦(左)。両腕にラスタカラーのブレスレットもしている。皮のサンダルをはいている。

写真6　バセテールのラスタ



ボブ・マーレイの赤いTシャツを誇っている。"Kaya"とは彼のレゲエ・ヒット・ナンバーの一つ。ガンジャのこと。

写真9　バセテールのラスタたち

写真8　バセテールのかき氷屋

写真 10　サンディ・ポイント＝主要道路沿いの下層階級（下の上）の住宅地

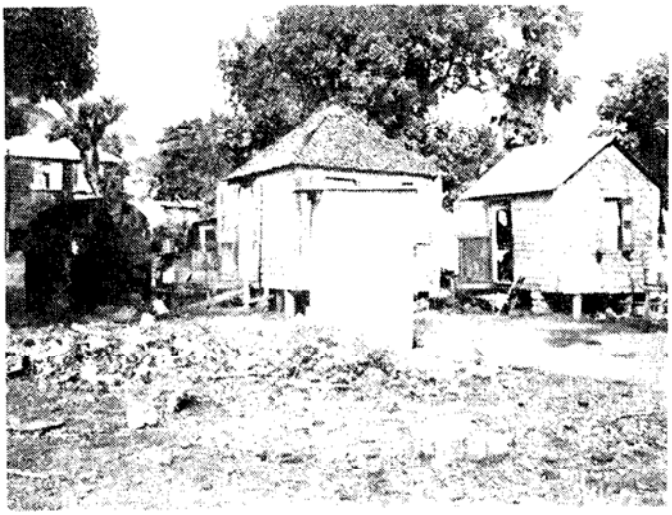


写真 12　サンディ・ポイントのラスタ

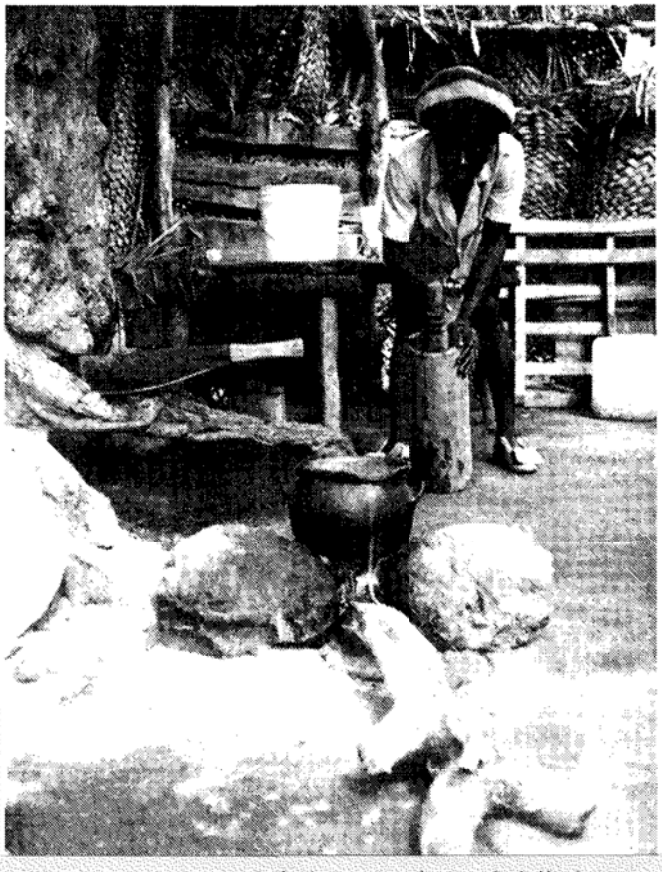
写真 11　サンディ・ポイントのラスタ

写真 13　サンディ・ポイントのラスタの洋服屋

写真 15　サンディ・ポイントのアイマの家

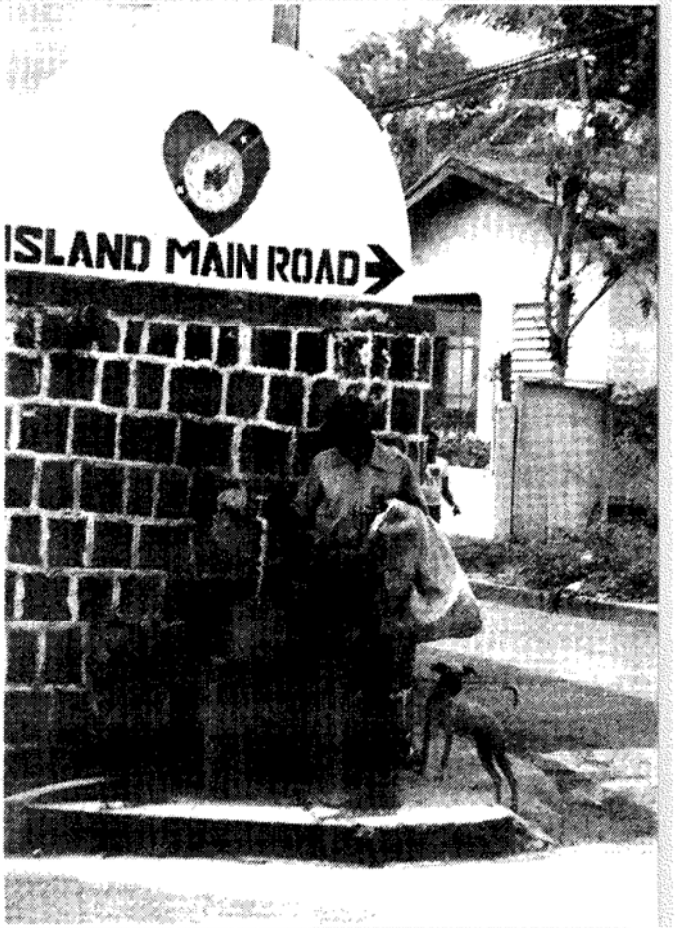
左からアイマの兄，アイマの長男ジャ・バボ，アイマ。哺乳ビンにはココナッツ・ミルクが入っている。

写真 16　料理中のジャ・バボ



炉でシーズニングされた魚をフライにする。臼と杵（mata & pishue）の使い方を示している。後方が台所。大木の根元になた（machete）が置いてある。

写真 14　サンディ・ポイント＝ミニバスターミナルにある共同水栓



この角より右側が主要自動車道。左側をずっと下るにつれスラムの景観となる。時計を囲むハート形の部分は国旗（国旗はハート型ではないが）。緑は豊穣な土地，黄色は常在の太陽の光，黒は伝統的遺産，赤は奴隷制から植民地時代を経て独立への闘い，二つの星は国民の希望と自由の象徴を表している。

写真 18　バセテールのおしゃれなラスタ

赤のヘッドタイと皮のサンダル，ゴールドのイヤリングとブレスレットをしている。

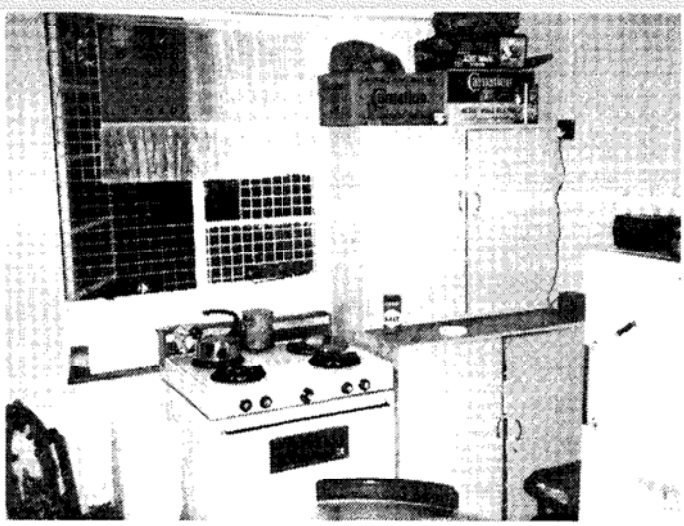
写真 17　ジャ・バボ夫妻の家の中

整頓されていて，隣にダブルベッドも置かれている。一部屋をカーテンで仕切って寝室を作っている。編んだバッグ，ビニール皮のショルダーバックがかけられていたり，大きな懐中電燈等も桟の上に置いてある。寝室にもラスタ関係の写真や絵が板壁に貼ってある。小さな家で，地上約50cm以上の高床式になっている。太めの丸木で土台を支えてあった。床下は物置としても利用される。水はサンディ・ポイントのバスターミナルにある共同水栓から汲んでくるようである。

写真 20　セント・キッツの伝統的料理「ポーク・ブレッド」

毎週土曜日の夕方，食べる家が多い。豚の腸部を血とスパイス等で煮込んだもの。あとはバターつきパン，飲物（この時は特製フルーツ・パンチ）。

写真 19　バセテールの医者の家の台所



電化製品，数多い調理台所用品が並ぶ。ステンレスの流し台の周囲も整頓されているが，所狭しと台所用品が占めている。食器類も客用など豪華なものはガラス戸棚に美しく陳列されている。